

福岡正信とインド

— 自然農法のグローカル化 —

Fukuoka Masanobu in India: Glocalization of Natural Farming

石坂晋哉

はじめに

本研究の目的は、福岡正信（1913～2008）が唱えた自然農法（natural farming）が、いかにしてインドに広がったかを明らかにすることである。福岡正信の自然農法は「無耕転、無除草、無肥料、無農薬」を原則とする農法として、インドをはじめ世界的に広く知られている。

本稿では、福岡の4度にわたるインド訪問の経緯を整理したうえで（第1章）、インドにおいて、福岡の自然農法を全面的に実践してきた農民の取り組み（第2章）、部分的に実践してきた農民の取り組み（第3章）、福岡とは異なる経緯で独自の「自然農法」を実践してきた農民の取り組み（第4章）の状況について、現地調査をもとに明らかにする。そのうえで、自然農法がインドに広がった過程を「グローカル化」という概念を用いて分析する（第5章）。

インドでの現地調査は、2017年8月、同年11月、2019年9月に行った。なお、本研究は、愛媛大学リサーチユニット「グローカル地域研究」の研究成果である¹⁾。

1) 本稿は、以下の研究会・学会発表および石坂（2018、2010）の内容に大幅な加筆修正を施したものである。(1) 愛媛大学リサーチユニット「グローカル地域研究 (GLOCAS)」研究会（2016～2018年、愛媛大学）、(2) 中四国法政学会第58回大会（2017年10月21日、愛媛大学）、(3) Sevagram International Conference on Non-violent Economy and Peaceful World（2017年10月28日、インド・ワルダール）、(4) The XIX ISA World Congress of Sociology（2018年7月18日、カナダ・トロント）、(5) International Seminar “Rethinking Development: Networks, Brokers and Devotion”（2019年3月29日、シンガポール）、(6) The 48th Annual Conference on South Asia, Madison（2019年10月19日、米国・マディソン）。

1. 福岡正信のインド訪問

福岡正信は1913年に愛媛県伊予郡南山崎村（現伊予市）に生まれた。横浜税関植物検査課に勤務していた1937年に、肺結核にかかって死に直面し、ある決定的な体験（筆者が聞いたところによると「神を観る」体験）をすることとなった。その後、地元に戻り実家の農業を継いだ福岡は、そのときの自身の決定的な体験を踏まえた農法を追究し、1950年頃からそれを「自然農法」と呼んで、その実践と普及に打ち込んだ（石坂2007a, b）。

1975年の福岡の著書『わら一本の革命』（柏樹社）が英訳され1978年に *One Straw Revolution* (Rodale 社) として米国で刊行されると、それはまたたく間にベストセラーとなり世界各地で読まれることとなった。『わら一本の革命』をはじめとする福岡の一連の著作は、世界30以上の言語に翻訳されている（石坂2018：19）²⁾。

また福岡は、1979年の米国訪問を皮切りに、17か国を訪問し、世界各地で自然農法の普及に尽力した（石坂2018：19）。インドには、1987～88年、1991年、1996年、1997年の合計4度、訪れている（石坂2018：19-20）。以下、福岡のインド訪問の足取りをたどってみたい。

(1) 第1回インド訪問（1987年12月～1988年2月）

福岡を初めてインドに招へいしたのは、インド東部の西ベンガル州シャンティニケタンを拠点とする社会活動家のパンナル・ダスグプタ（Pannalal Dasgupta, 1908～1999）であった。ダスグプタは、インドの共産主義運動の中で頭角を現した革命家であったが、独立運動家 M. K. ガンディー（1869-1948）や詩人 R. タゴール（1861～1941）から強い影響を受け、タゴール農村開発協会を設立し、農村再建のための活動に取り組むようになった人物である（牧野2011：44-59）。

ダスグプタは、シャンティニケタンのヴィシュヴァ・パーラティ学園（タゴール国際大学）で日本語教師を務めていた牧野財士（1924～2010）に、滞印中の福岡の通訳を依頼した。牧野はこの訪問時のみならず、その後の第2回（1991年）および第4回（1997年）のインド訪問時にも福岡に付き添って、日本語と英語による福岡の講演や会話をヒンディー語に通訳する役割を果たすことになる（牧野2011）。

福岡は1987年12月16日、インド東部の西ベンガル州カルカッタ（現コルカタ）の空港に到着し、シャンティニケタンに向かった。その後、インド北部ウッタル・プラデーシュ州バナーラスを経て、12月29日にインド西部マハーラーシュトラ州ボンベイ

2) 福岡の著作の各語翻訳の経緯については別稿で詳しく論じる予定である。

(現ムンバイ) で開催された第28回サルヴォーダヤ大会(ガンディー主義者の集まり)に出席した。その後、インド南部アーンドラ・プラデーシュ州ハイデラーバードと、翌1988年1月にはインド中央部マディヤ・プラデーシュ州の小さな町ラスリアを訪問し、1月7～9日にはマハーラーシュトラ州に戻りプネー大学で開催された第15回全インド科学会議(All India Science Congress)に出席した。その会議の場で福岡は、当時のインド首相ラジーヴ・ガンディー(1944～91)や、緑の革命(green revolution、品種改良と灌漑および化学肥料による米麦増産)に尽力したM. S. スワームイナー(1925～)らに面会している。その後、福岡は、ボンベイ、タミル・ナードゥ州マドラス(現チェンナイ)、ボンディシェリー、シャンティニケタン、ウツタル・プラデーシュ州カーンプル、デリー、カルカッタ、オリッサ(現オディシャー)州ブバネシュワールを訪問後、2月7日にカルカッタを発ち、ネパールとタイを経由して日本に帰国した(牧野2011)。

(2) 第2回インド訪問(1991年11月～12月)

福岡の第2回訪印は、インド森林環境省・荒地開発局長サマル・シンの招へいによるものだった。1991年11月30日に日本を発ち、12月7日にカルカッタからインドに入国した。シュンドルボン国立公園を訪問した後、デリーに向かい、当時の森林環境大臣カマル・ナート(1946～)や、当時の首相P. V. ナラシンハ・ラーオ(1921～2004)に面会した。その後、チャンバル渓谷を訪問、そして12月23日にはインド北東部ニプル州を訪問。12月29日にカルカッタを発ち、タイを経由して、翌1992年1月8日に日本に帰国した(牧野2011, 福岡2004a: 405-427)。

(3) 第3回インド訪問(1996年3月)

第3回訪印は、タンザニアから日本への帰路、急遽、経由地のボンベイに立ち寄ることにしたものである。ボンベイには4日間滞在した³⁾。

(4) 第4回インド訪問(1997年10月)

福岡にとって最後の訪印となったのは、1997年10月のことである。ボンベイからインドに入国し、マハーラーシュトラ州のナーグプル、ワルダール、セーワグラーム、パウナルを訪問した。福岡は、10月2日のガンディー生誕記念集會に参加した(牧野2011)。この時の訪印の様子はドキュメンタリー記録(映画「地球で生きるために―ドキュメンタリー福岡正信インドに行く」監督:今泉光司、1997年)に残されて

3) 筆者による矢島三枝子氏へのインタビュー(2018年2月12日、岐阜)。

いる。

これら計4回の訪印を通して、福岡はインドの多くの人びとに会い、直接対話をしただけでなく、具体的な農業技術指導も行った。なかには、次章以降で示すように、福岡との出会いが人生の転機となった者もいたのである。

2. 福岡正信の「弟子」による自然農法：ターイタス農園（石坂2018：10-13）

(1) ターイタス農園の概要

ターイタス農園は、インドのマディヤ・プラデーシュ州ホーシャンガーバード県ラスリアにあり、ラーजू・ターイタス（Raju Titus, 1946～2018）が運営していた農園である。農園の柱は、(1)小麦、(2)ヤギ飼育、(3)ギンネム（*subabul*）の木の活用、であった。このうちヤギは、ミルクおよび食肉加工用に飼育していた。ギンネムの木は、小麦などの作物に対する窒素供給作用があるだけでなく、ヤギの飼料や薪炭としても活用していた。その他、豆類や野菜も生産していた。

ターイタスは、福岡の『わら一本の革命』の英訳インド版を読み1985年から兼業農家として自然農法を実践してきた。ターイタス農園では、福岡正信が熱心に開発を進めた「粘土団子」による作物の栽培の実験を続けていた。また、福岡正信の自然農法の「無耕転（不耕起）」原則を忠実に守っていた点も特筆すべきである。ターイタス農園の土壌には大量のミズがみられたが、これは耕さないできたことの効果なのだという。また、一見すると雑草のようなアメリカブクリョウサイ（*gajar ghans*）を、刈り取らず枯らすこともせず、圧縮しその場にそのまま留め置くことが、栽培における重要なポイントになっていた。

なお、ラスリアのターイタス農園から約1.5kmのところには、クエーカー教徒のコミュニティである「フレンズ・ルーラル・センター（Friends Rural Centre）」がある。ここは、英領期からのクエーカー教徒の一大拠点であり、ラスリア周辺には多くのクエーカー教徒が住んでいる。ラーजू・ターイタスもクエーカー教徒であり、「ターイタス」という名も聖書に由来する。

フレンズ・ルーラル・センターでは、M. K. ガンディーの「弟子」であった英国人女性マジョリー・サイクス（1905～1995）が中心となり、1970年代末から1980年代にかけて、農業のあり方を見直す機運が高まっていた。当時インドで広がっていた緑の革命の弊害として、土壌が悪化し、農村部の貧困も改善しない点が問題とされたのである。そうしたなか、1983年末、コミュニティのメンバーの一人バルタープ・アッガールワル（Partap Aggarwal）が米国で出版された福岡正信『わら一本の革命』

の英訳版について知り、さっそくそれを取り寄せ、コミュニティー・メンバー間で読書会を開いた。これがインド版『わら一本の革命』（英訳）につながったのである。

(2) ラージュ・ターイタスへのインタビュー

筆者は2017年8月25～27日にターイタス農園を訪れ、ラージュ・ターイタスにインタビューを行った。やりとりは英語で行われた。以下は、インタビュー内容の一部の和訳である。

石坂：「自然農法を行うようになった経緯を教えてください。」

ターイタス：「私は近所の製紙会社に勤務していました。そのかわり、両親から引き継いだ農園で、化学肥料・農薬を使った農業をやっていたのですが、あるとき、採算が合わず、離農しようとしていました。そんな時、フレンズ・ルーラル・センターと関わりの深かった母が、福岡正信氏の『わら一本の革命』を借りてきてくれて、その本を読み、自然農法をやってみようという気になったのです。1985年、私は、それまで飼っていた牛や水牛を売り払い（周囲は、私が正気を失ったのではないかと心配しました）、自己流で自然農法を始めてみたところ、幸い、すぐにうまくいったのです。1988年には福岡正信氏の訪問を受け、私の農園を採点してもらったところ、「60点」とのことで、60点というのは福岡氏としてはNo.1の評価だったのです！福岡氏からは、「君は正しい方向を向いている。いつの日か、日中、何も仕事をしないでよい日がくるだろう」と言われ、大変感激したのを覚えています。福岡氏からは、当時農園のあちこちにはびこってしまい困っていたワセオバナ（*kans*）の処理方法も教わりました。福岡氏の1999年（※1997年の誤りか？筆者注）の訪印時は、ギンネム（*subabul*）の木を家畜の飼料としても活かすべきだという助言をもらいました。私は2005年に製紙会社を退職し、その後は農業一本でやっています。私は、いつの日か、全世界が福岡氏の農法を実践することになると確信しています。それは100%確実です。」

石坂：「インドの農業の現状について、どのようにみえていますか。」

ターイタス：「インド農業の現状は深刻です。まず、融資返済苦によって多くの農民が自殺をしています。また、生態環境の悪化への対策が今、必要とされています。特に水問題が深刻です。私は、洪水も渇水も耕起が原因だと考えています。福岡氏の「耕さない」という教えは、最善で、シンプルで、最も容易な方法です。ターイタス農園の井戸の深さは35ft（約10m）にすぎませんが、近隣は150ft（約45m）掘っても水不足に悩んでいます。ターイタス農園では「無耕転（不耕起）」により保水が実現しているのです。また、粘土団子も、現状打開の鍵です。粘土団子は、

どこでも適用可能で非常にシンプルではありますが、容易ではありません。ターイタス農園では今も粘土団子の実験を重ねています。」

石坂：「ターイタス農園での粘土団子の実験についてお聞かせください。」

ターイタス：「福岡氏が1999年（※1996年の誤りか？筆者注）タンザニアからの帰路にインドに来られた時、粘土団子の重要性を強調されていました。以来、私も粘土団子に取り組むようになりました。粘土団子は、どんな土を使うかが決定的に重要です。丈夫な土でなければなりません。私はインド各地でよい土を探し、ジャールカンド州の土がとともよいことに気付きました。しかしそのジャールカンド州の土に、さらにもっと、何かをミックスさせる必要があると考えています。ターイタス農園では来年から、米についても粘土団子でやっていこうとしています。そのためにも、ネズミヤリスに、粘土団子の中の種子（米など）を食われてしまうのを防ぐ工夫が必要です。そこで今、粘土にヤギの尿を混ぜた団子と、何も混ぜない団子とを作って、しばらくこうしてベランダに放置し、実験をしているところです。ヤギの尿を混ぜたほうには被害が出ていないので、この方法は有効なのではないかと考えています。」

(3) 小 括

福岡は1988年の第1回訪印時にラスリアのターイタス農園を訪問した。インタビューからもわかるとおり、福岡と実際に会ったことは、ターイタスの人生において決定的な出来事となった（写真1）。福岡の第3回訪印時にも、ターイタスは福岡に会ったようである。

ターイタスが福岡正信の自然農法を初めて知るきっかけとなったのが、フレンズ・



写真1 ターイタス家のアルバムに保存されていた福岡正信訪問時の写真
（左から、福岡正信、ラージュ・ターイタス、牧野財士）（筆者撮影）

ルーラル・センターにおける農業・環境の見直しを図る取り組みであった点も重要である。タイタスと自然農法とが結びついた背景には、クエーカー教徒のコミュニティーおよびガーデンイー主義活動家の存在があったのである。

タイタス農園は、インドの自然農法運動の一大拠点となっていた。筆者訪問時にも、近隣や他州から多くの人びとが研修のためタイタス農園を訪問し、タイタスは自宅のパソコン・モニターでスライドをみせながら、自然農法について講演を行っていた。またタイタスはフェイスブックで自然農法について積極的に発信を行っていた。

3. 伝統的作付システムの再興：ジャルダリー農園（石坂2020：4-17）

(1) ジャルダリー農園の概要

ジャルダリー農園は、インドのウッタラーカンド州テリー・ガルワール県ジャルダールガオン村にあり、現在、ヴィジャイ・ジャルダリー（Vijay Jardhari, 1952～）が運営している農園である。農園では、バーラナージャー（*barahnaja*）と呼ばれる伝統的な作付システムを採用し、シコクビエや、ヒエ、アワのほか、種々のマメ類、油料作物、野菜類などを栽培している。水牛の飼育も行っている。

ジャルダリー農園は、全体としては自然農法の農園というわけではないが、ジャルダリーは福岡正信の自然農法についても研究している。「フクオカさんからは大いに啓発された」とのことであった。例えば、自宅の横にある菜園では「無耕耘、無除草、無肥料、無農薬」をできるかぎり実践しているという。また、新月の後、月が満ち始めるタイミングでコムギの種まきをすべきだというのを、福岡から学んだとのことであった。

ジャルダリーは、ウッタラーカンド州が位置するヒマラヤ山麓の中山間地域における農業振興のため、以下の4つの活動を展開している。

第1が、「種子を救え運動（Beej Bachao Andolan）」である。種子を救え運動は、1980年代半ばにこの地域で始まった運動であり、地元で伝わる多様な在来の種子の保存と、その活用を広げていくことにより、農業の発展や環境保護をめざす運動である。その背景には、いわゆる緑の革命により、品種改良された高収量品種（HYV）を農家が購入するようになって以降、伝統的な作物の種子の種類が激減しつつあることへの危惧がある。長年、地元で伝えられてきて、中山間地域の丘陵地斜面での栽培に適応してきたと考えられるさまざまな種子を、とにかく今、まずは収集し、保存していかなければならない、とジャルダリーらは考えている。近年、ウッタラーカンド州にも導入されつつある遺伝子組換え作物（GMO）に対しても、ジャルダリーら

は反対している。

第2の取り組みは、バーラナージャーと呼ばれる伝統的な作付システムの復興である。バーラナージャーは、ウッタラーカンド州周辺の中山間地域で行われてきた作付システムであり、種々の穀物作物、マメ類、油料作物、野菜類、香辛料、青刈り飼料等を混作栽培するシステムである。バーラナージャー (*barahnaja*) という語の語源は、「12 (*barah*) + 穀物 (*anaj*)」に由来し、語義は「12の穀物」という意味であるが、作付される作物の種類は12種類に限られず、通常は20種類程度になる。

バーラナージャーで作付される主な作物は、シコクビエ (コーダー)、アマランス、ソバ、モロコシ、トウモロコシ、ラージマール豆、ホースグラム豆、黒大豆、ノーロンギー豆、ケツルアズキ豆、ササゲ豆、アズキ豆、キマメ、ムーング豆、エゴマ、ゴマ、ジャッキヤー、麻、サンヘンブ、キュウリ、である (表1)。

表1 バーラナージャーの作物 (英：英語名、現：現地語名、学：学名、和：和名)

シコクビエ(コーダー)	英：Finger millet、現：Koda/Mandua、学： <i>Eleusine coracana</i> 、和：シコクビエ
アマランス	英：Amaranth、現：Marsa/Ramdana、学： <i>Amaranthus cruentus</i> 、和：アカアワ
ソバ	英：Buckwheat、現：Ogal/Kuttoo、学： <i>Phagopyrum esculentum</i> 、和：ソバ
モロコシ	英：Sorghum、現：Jonyala/Jowar、学： <i>Sorghum vulgare</i> 、和：モロコシ
トウモロコシ	英：Maize/Corn、現：Makka/Mungri、学： <i>Zea mays</i> 、和：トウモロコシ
ラージマー豆	英：Kidney bean、現：Rajma、学： <i>Phaseolus vulgaris</i> 、和：赤インゲン豆
ホースグラム豆	英：Horsebean/Horsegram、現：Gaheth/Kulath、学： <i>Macrotyloma uniflorum</i> 、和：ホースグラム
黒大豆	英：Black soybean、現：Bhatt、学： <i>Glycine spp.</i> 、和：黒大豆
ノーロンギー豆	英：Ricebean、現：Naurangi/Rayaans/Jhilang、学： <i>Vigna umbellata</i> 、和：竹小豆
ケツルアズキ豆	英：Blackgram、現：Urad、学： <i>Vigna mungo</i> 、和：ケツルアズキ
ササゲ豆	英：Cowpea/Black eyed pea、現：Sunta/Lobiya、学： <i>Vigna unguiculata</i> 、和：ササゲ
アズキ豆	英：Adzuki bean、現：Ragadvaans、学： <i>Vigna angularis</i> 、和：アズキ
アズキ豆	英：Adzuki bean、現：Gurunsh、学： <i>Vigna angularis</i> 、和：アズキ
キマメ	英：Pigeon pea、現：Tor、学： <i>Cajanus cajan</i> 、和：キマメ
ムーング豆	英：Moongbean/Green gram、現：Moong、学： <i>Vigna radiata</i> 、和：緑豆
エゴマ	英：Perilla/Wild sesame、現：Bhangjeer、学： <i>Perilla frutescens</i> 、和：エゴマ
ゴマ	英：Sesame、現：Til、学： <i>Sesamum orientale/indicum</i> 、和：ゴマ
ジャッキヤー	英：Cleome、現 Jakhya、学： <i>Cleome viscosa</i> 、和：フウチョウソウ
麻	英：Indian hemp、現：Bhaang、学： <i>Cannabis sativa</i> 、和：麻
サンヘンブ	英：Sann hemp、現：Sann、学： <i>Crotalaria juncea</i> 、和：サンヘンブ
キュウリ	英：Cucumber、現：Kaakhadi/Kheera、学： <i>Cucumis sativus</i> 、和：キュウリ
※ 以下は、バーラナージャーには含まれないミレット (キ雑穀)	
ヒエ(ジャンゴラー)	英：Barnyard millet、現：Jhangora/Maadirā、学： <i>Echinochloa spp.</i> 、和：ヒエ
アワ(コウニー)	英：Foxtail millet、現：Kauni/Kangni、学： <i>Sitaria italica</i> 、和：アワ

(出典：Jarhdhari 2015を参考に筆者作成)

バーラナージャーは、具体的には、2年に一度、雨季の夏作(カリフ作)として行われる(インドでは一般に、雨季の夏作がカリフ作と呼ばれ、乾季の冬作がラビ作と呼ばれる)。第1年目は、5～6月にバーラナージャーの種まきをし、10～11月に収穫がなされる。収穫後は翌3月まで休閑とする。第2年目の夏作(カリフ作)は、4～5月に、ヒエ(ジャンゴラー)やアワ(コウニー)やコメの種まきをし、9～10月に収穫がなされる。収穫後、冬作(ラビ作)として、10～11月に、コムギやオオムギとレンズマメ等マメ類の種まきをし、4～5月に収穫がなされる。この2年周期のサイクルをローテーションしていく。

多くの世帯では、自分たちの畑を複数の区画に分け、毎年、夏作（カリフ）期には、ある区画ではバーラナージャーを、別の区画ではヒエやアワ等を栽培し、冬作（ラビ）期には、バーラナージャー後の区画は休閑、ヒエやアワ等を収穫した後の区画ではコムギ等を栽培する。次の年には区画で栽培される作物が入れ替わることになる。

ジャルダリーらは、バーラナージャーは、混作により生態的な安定性や共生関係が創出されるだけでなく、土壌侵食防止効果や、食料安全保障（多様な食材と栄養の確保）の観点からも、優れた作付システムだと考えている。

第3に、主食作物としてのミレット（≡雑穀）の地位の復権をめざしている。一般的に近年ではインドでも、コメとコムギこそが「優れた」主食作物だと考えられがちである。ウッタラーカンド地方の中山間地域では伝統的に、コメやコムギではなく、シコクビエ、アマランス、ヒエ、アワなどのミレットが主食作物として栽培されてきたが、地元住民も、それらは近代적ではない「遅れた」作物と考えるようになり、これまで、コメやコムギの栽培・摂取が積極的に進められてきた。しかしウッタラーカンド州において、灌漑がなされている農地は全体の13%にすぎず、コメやコムギの生産に十分な水を確保できる農地は少ない。中山間地域の農業として、無理にコメやコムギをつくるのではなく、少ない水でも栽培可能な種々のミレット栽培に、今あらためて注目すべきだとジャルダリーらは考えている。また、シコクビエ、アマランス、ヒエ、アワなどには、高い栄養価が含まれており、栄養面でもコメやコムギに決してひけをとらない。

ウッタラーカンド地方に伝わる民謡の一つに、「ウッタラーカンドの人びとの心身の強さの元であったコーダー（シコクビエ）やジャンゴラー（ヒエ）は、いつの間に、いったい、どこに消えてしまったのか」という嘆きの歌詞がみられる。ジャルダリーらは、シコクビエやヒエなどのミレットの価値復権を通じて、それらを伝統的に主食としてきた地元の人びとの自尊心を高め、中山間地域の地方再生へとつなげていきたいと考えている。ちなみにジャルダリー宅で筆者もシコクビエ（コーダー）の粉から作られたローティ（パン状の主食）をいただいたが、非常に美味であった。

第4に、集落近郊の森林の再生事業である。この地域では1960年代に急激に商業伐採が進められ、1970年代からそれに対する地元住民の森林保護運動が、チプコー運動（「チプコー」とは、現地語で「抱きつけ」の意）として展開した。地元住民たちが、伐採請負人の前で、木に抱きついて伐採を阻止したこの運動は、世界的にも広く知られ、1981年には政府による商業目的伐採全面禁止令が出された（石坂2011）。その後、破壊された森林をいかに再生するかが課題となったわけであるが、ジャルダールガオ

ン村周辺では、1980年代半ば以降、植林と森林管理のための村人主体の組織が整備され、ほぼ皆伐されていた山に、ナラやシャクナゲ等を主体とする良質な森をつくりあげることになった。この森林管理活動にも、ジャルダリーらは積極的に関わってきている。

ジャルダリーは、これらの取り組みについて定期的にインド有機農業協会（OFAI, Organic Farming Association of India）の大会で報告したりしているとのことであった。

(2) ヴィジャイ・ジャルダリーへのインタビュー

筆者は2019年9月6～7日にジャルダリー農園を訪れ、ヴィジャイ・ジャルダリーにインタビューを行った。やりとりはヒンディー語と英語で行われた。以下は、インタビュー内容の一部の和訳である。

石坂：「現在のウッタラーカンドの農業の状況について、教えてください。」

ジャルダリー：「日本でも同様だと思いますが、特に中山間地域の農業の状況は危機的です。地元のある女性が、次のように言いました。『畑にとっての脅威は何か？ 野生動物、異常気象、政府の役人だ。（*"khetii par kiskii maar? jangalii jaanwar, mausam, aur sarkaar."*）』

野生動物のうち、特に深刻な被害をもたらすのは、イノシシです。夜間に畑を荒らします。山奥の環境破壊が進み、食料が不足して、人里近くまで出てくるようになったのです。また、ヒンドゥー至上主義政党が勢力を強め、ヒンドゥー教の不殺生の教義を掲げて、イノシシ猟が禁止されたことも影響しています。イノシシのほかに、サルも厄介です。サルは昼間にやってきて、人間をおそれません。

気候変動により、異常気象が続いています。2013年の集中豪雨でウッタラーカンド州は甚大な被害を受けましたが、その後も毎年のように異常気象が見られます。

政府の政策は、表向きは、有機農業に積極的で、州によっては自然農法の重視を掲げているところもありますが、村落レベルでは依然として、化学肥料と高収量品種による慣行農業が強力で推進されています。近年は、遺伝子組換え作物の問題も出てきました。

ちなみに、最近アーンドラ・プラデーシュ州などで自然農法推進が掲げられ、話題になりました。あれは、正式には『スパーシュ・パーレーカル自然農法』というものです。スパーシュ・パーレーカル（Subhash Palekar）氏は、以前は、自身の提唱する自然農法を『予算ゼロ自然農法（Zero Budget Natural Farming）』と呼んでいましたが、最近は、『スパーシュ・パーレーカル自然農法』という名称に変更したようです。」

石坂：「ところで、ジャルダーリーさんは、いつもガンディー主義者が身に付ける木綿手織布のカーディー服を着ていらっしやいますね。ガンディー主義運動に関わるようになった経緯を教えてくださいませんか？」

ジャルダーリー：「高校（インターコレッジ）に通っていた頃、私と同じ村出身のある人が、近所の町チャンバで本屋を営業していました。その人が、別の都市デラードゥーンに移り住むことになり、本屋を継いでくれないかと声をかけてくれたので、私は引き受けました。ちょうどその頃、ウッターラカンド地方全体で禁酒運動が盛んになり、チャンバの町で、友人のクンワル・プラスーンらとともに、私もその運動に参加するようになったのです。ガンディー主義者のスダルラール・バフグナーやドゥーム・スイン・ネーギーといった人々も、運動の中心的な活動家でした。その後、引き続きチプコー（森林保護）運動が始まり、その一環で1974年のウッターラカンド行脚や、1979年のパディヤルガル村での大集会などで、スダルラール氏と共に過ごし、ガンディー主義の考え方・生き方から強い影響を受けたのです。」

(3) 小 括

ジャルダーリーは、ターイタス（前出、第2章）と比べると、福岡正信の自然農法を忠実に継承し広げていこうという熱意は弱い。それでもジャルダーリーは、福岡正信の自然農法について強く意識しており、福岡のことを深く尊敬している。自宅の菜園では、自然農法を実践していると強調していた（写真2）。

ジャルダーリーらの種子を救え運動やバーラナージャーと、福岡正信の自然農法との間には、次のような共通点があると考えられる。それは、近代的な農業のあり方に



写真2 自然農法による自宅菜園でシナモンの葉を摘むジャルダーリー
（奥にはピンダールー（サトイモの一種）、手前にはターメリックの葉が見える）（筆者撮影）

対する批判的視座をベースとし、それとは異なるオルタナティブな農業を目指している点である。その結果の一つとして、ジャルダラーも福岡も共に、単一作物ではなく多様な種を栽培することを重視している。また、福岡の自然農法は究極的には「何もしない」境地を目指すものである一方で、その自然農法の一環として福岡が説いた米麦連続不耕起直播は、かなり複雑な作付体系であり（福岡2004b：233-312）、ジャルダラーらが推進するパーラナージャーとも、その基本的精神において重なるところが大きいようにも感じられる。

4. 独自の「自然農法」：カルパヴルクシャ農園

(1) カルパヴルクシャ農園の概要

カルパヴルクシャ農園は、インドのグジャラート州ヴェルサル県デーハリにあり、現在、アビジャイ・サーヴェー（Abhijay Save, 1988～）が中心となって運営している農園である。農園の柱は、(1) チクー（サボジラ）の果実、(2) ココナッツ、(3) 米、(4) バナナ、(5) 牛の飼育、である。主要な収入源となっているのは、ココナッツの苗と油、およびチクーの実である。牛は、ミルクのほか、尿を作物の病虫害予防に使用している。その他、アレカナッツ（ピンロウ）や野菜や豆類も生産している。米と野菜は主に自家消費用である。稲藁は牛の飼料として活用される。

カルパヴルクシャ農園はもともと、アビジャイ・サーヴェーの祖父バスカル・サーヴェー（Bhaskar Save, 1922～2015）が始めた農園である。バスカルは学校教師であったが、ある時その職を辞し、農業を始めた。1960年代末から化学肥料を使うのを一切やめ、独自に自然農法の方法を開発していった。バスカルが福岡のことを初めて知ったのがいつだったのかは不明であるが、アビジャイによると、祖父バスカルはインド中を旅し、有機農業の仲間たちとの交流もあったので、おそらくかなり早い時期（1980年代前半）に福岡正信のことも知るようになったに違いないとのことである。

アビジャイ・サーヴェーは、スワッディヤーヤ（Swadhyay）というヒンドゥー教のスピリチュアルな運動の組織が運営する全寮制学校（ashram）で7年間学んだ後、3～4年前から実家に戻ってカルパヴルクシャ農園で自然農法を実践している。高等教育を受けた後に都市に出るのではなく農村で生きていく選択をしたのは、スワッディヤーヤで学んだことの影響が大きいという。アビジャイの父も、兼業農家として同農園で自然農法を実践している。

(2) アビジャイ・サーヴェーへのインタビュー

筆者は2017年11月2～4日にカルパヴルクシャ農園を訪れ、アビジャイ・サー

ヴェーにインタビューを行った。やりとりは英語で行われた。以下は、インタビュー内容の一部の和訳である。

石坂：「カルバヴルクシャ農園の自然農法とはどんなものか、教えてください。」

サーヴェー：「ウパニシャッド（ヒンドゥー教の聖典の一つ）にも言われているように、自然はすでに完全にできあがっているものです。それを、この農園でも小さなサイズで再現する、というのがコンセプトです。自然はおのずと、完璧な状態をもたらしてくれるものです。」

例えば、このチクーの木の下にはたくさんの白い巻貝の貝殻が落ちていますね。これは実は、外来種のカタツムリのもので、この地方にもともといた種ではありません。かつて誰かが、オーストラリアだかアフリカだかから持ち込んだのです。当初、このカタツムリは、雑草を食べてくれるので、重宝しました。しかし、そのうち増えすぎて、野菜まで食べてしまうようになって困っていました。繁殖のスピードも速いのです。すると、このカタツムリを食べる大きなサギが、この農園に来るようになりました。自然というのは、そうやって自ずとうまく調整してくれるものなのです。

工業では原料の6割で製品が出来、残り4割はロスになったとしても、それでも成功だとされたりするものだと思います。それに対し農業は、たった1粒の種から、200とか、多いときは1,000もの種が収穫可能です。それにも関わらず、農民が豊かになれないのは、農法を間違えているからだとは思いますが。自然農法は、コストと収量のバランスからみて、最適な農法だというのが私の考えです。」

石坂：「具体的な栽培方法について教えてください。」

サーヴェー：「新しい畑を作るときは、3種類の作物を同時に植えます。第1に、ココナッツやチクーのような樹齢50年以上になる木、第2に、バナナやカスタードアップルのような樹齢5～20年になる木、そして第3に、寿命が1年未満の野菜、を組み合わせて同時に工夫しつつ栽培するのが一番のポイントなのです。第1のココナッツなどは、間隔を空けて植えておきます。はじめは第3の野菜などを優先して育てていきます。第2のバナナの類が成長してきたら、それと第3（野菜類）を同時に優先して育てていきます。そのことが副次的に第1のココナッツの類にとってもよい効果をもたらすのです。」

石坂：「この地域では、自然農法は盛んなのですか。」

サーヴェー：「いいえ。しかしだんだんとその重要性に人びとも気づいてきているように感じます。そもそもこの地域は、農民は比較的少ないのです。村民の多くは、アパレル関係や機械関係の工場で働いています。海岸沿いには漁業コミュニティー

もありますが、最近は多くの漁民が工場で働くようになっていました。農家は、数が少ないだけでなく、経営規模も大きくないのが特徴です。自家消費用のコメと、少しの野菜を育てています。商品作物として、ココナッツや、チクーを育てています。」

石坂：「例えば、化学肥料や農薬の使用を推進する勢力から、自然農法をさせまいという圧力があつたりするのでしょうか。」

サーヴェー：「それはあまり感じません。化学肥料や農薬を作っている会社は、最近では、有機肥料や有機的な殺虫剤や除草剤も売り出すようになっていました。有機肥料や有機的な殺虫剤や除草剤を、化学肥料や農薬よりも高価で売り出しています。」

石坂：「福岡氏は、無耕耘（不耕起）を唱えています、カルパヴルクシャ農園ではいかがですか。」

サーヴェー：「米を育てる際に、土の表面のみを浅く耕しています。このあたりは、浅いところの土のほうが肥沃なのです。そのため、深くは掘りません。浅く耕すことの主な目的は、乾季に土の表面がひび割れてしまうのを防ぐためです。耕すという作業は、アリやさまざまな土中生物が自動的にやってくれているものです。

浅く耕すために、トラクターも用いますが、大規模なトラクターは使いません。祖父がよく言っていたのですが、牛車よりも重いものを農園に立ち入らせてはいけません。土を踏み固めすぎるのはよくないのです。」

(3) 小 括

インドでは、近代的な農業のあり方とは異なる、オルタナティブな農業を目指す多様な運動が展開してきた。例えば、有機農業の創始者として知られるアルバート・ハワード（Albert Howard, 1873～1947）は、インドのインドールを拠点としていた。1970年代に豪州で始まったパーマカルチャー運動の流れも、インド各地に広がっている。1960年代から独自の自然農法を始めたバスカル・サーヴェーも、有機農業運動の流れと関係を持ちながら、自身の農法を追究していったのである。

福岡は1997年の訪印時にカルパヴルクシャ農園を訪問し、バスカル・サーヴェーにも会っている。ドキュメンタリー記録（映画「地球で生きるために」）にも、福岡が牛車に乗って同農園を見学し「ここは本当のパラダイス」だと感激している場面が登場する。福岡とバスカル・サーヴェーとの出会いは、福岡にとっても、バスカル・サーヴェーにとっても、大きな励ましとなる出来事であった（写真3）。



写真3 サーヴェー家の倉庫の壁に埋め込まれている福岡正信訪問記念プレート（筆者撮影）

5. インドにおける自然農法の広がり

グローカル化（glocalization）をめぐる従来の研究では、グローバル化が世界の画一化や均質化をもたらすわけではなく、グローバル化が常にローカル化（土着化）を伴うことが明らかにされてきた。また、グローカル化という視角は、特定のローカルな場が、ナショナルな制約を受けつつも、ときにはその制約をも飛び越える形で、世界の他のローカルな場と直接つながっていく様相を明らかにしようとするものである。

本章では、愛媛・伊予で始まった自然農法がインド各地に広がっていく「自然農法のグローカル化」のメカニズムについて、次の3つの方向から分析を試みる。第1は、グローカル化プロセスにおける「発信」局面のプロモーションの力に注目するアプローチである。第2は、グローカル化プロセスにおける「受信」局面の諸事情に注目するアプローチである。第3は、グローカル化プロセスにおいて、当事者たちが意図しないさまざまなズレが生じたり、相互促進作用が起動したりするダイナミズムに注目するアプローチである。

(1) 自然農法のプロモーションーグローカル化の「発信」局面

自然農法が世界各地に知られていく大きなきっかけとなったのは、福岡正信が自然農法についての本を書き出版したこと、さらに、その本が各語に翻訳され出版されたことである。インドでは、1983年にインド版の英訳が刊行された後、マラヤーラム語、カンナダ語、テルグ語、タミル語、ヒンディー語、マラーティー語、グジャラーティー語、ベンガル語、パンジャービー語への翻訳がなされた。インドでは長年にわ

たって、『わら一本の革命』だけでなく、『自然農法』や『自然に還る』の英訳も、増刷を重ねている。ラージュ・ターイタス（第2章）も、ヴィジャイ・ジャルダリー（第3章）も、バスカル・サーヴェーとアビジャイ・サーヴェー（第4章）も、そうした福岡の著作を読んでいた。もし福岡が本を書いていなければ、また、もし福岡の本が翻訳されていなければ、現在自然農法がここまで広く世界に知られることはなかったであろう。

福岡正信が世界17か国を訪問したことも、重要である。ラージュ・ターイタスやバスカル・サーヴェーは、福岡と実際に会い、福岡から直接助言を受けたことが、自然農法を実践していくうえでの大きな励みになっていた。

また、福岡正信だけではなく、彼のいわば「弟子」たちの努力も大きい。例えば、かつて福岡の下で学び、『わら一本の革命』英語版の共訳者の一人となったラリー・コーン（Larry Korn）は、自然農法のさらなる普及のために、*One-straw revolutionary: The philosophy and work of Masanobu Fukuoka* という本を執筆し2015年に出版した。同じく福岡の下で学んだパノス・マニキス（Panos Manikis）は、ギリシアにおいて、自然農法のワークショップを開催している⁴⁾。

(2) 自然農法が根付いた土壌—グローバル化の「受信」局面

愛媛から発信された自然農法が世界各地のローカルティに根付いていく過程で重要となるのは、その「媒介者（agent）」となる人物や組織の存在である。インドの場合、媒介者の役割を果たしていた人物として、福岡を招へいたパンナラル・ダスグプタ（第1章(1)）とサマル・シン（第1章(2)）、通訳を務めた牧野財士（第1章(1)）、福岡の自然農法についてインドでいち早く紹介したマジョリー・サイクス（第2章）、『わら一本の革命』英訳インド版の普及に尽力したパルタープ・アッガールワル（第2章）らを挙げることができる。また、ガンディー主義者のネットワークや、クエーカー教徒コミュニティや仏教教団（牧野は日本山妙法寺とも関係が深かった）などの宗教組織の存在も大きかった。

自然農法がインド各地で実践されるようになった背景としては、2点、指摘しておきたい。第1に、インドにおいて環境問題や農業問題がクローズアップされてきた点である。1970年代末から1980年代そして1990年代にかけて、緑の革命（品種改良による米麦増産）がさまざまな負の側面（環境悪化や格差拡大）をもつとの批判や、大規模ダム開発に対する反対運動が盛り上がりを見せるようになり、2000年代に入ると遺伝子組換え作物導入反対運動も始まった。さらに、水不足の深刻化（地下水位低下や水

4) 筆者による矢島三枝子氏へのインタビュー（2018年2月12日、岐阜）。

源枯渇等)や、融資返済苦による農民の自殺の問題などが、大きく取り上げられるようになった。そうした問題への解決策の一つとして、自然農法が注目を集めるようになった面があると考えられる。

第2は、インドにおける農協の組織力の弱さである。日本では多くの場合、例えば農薬や化学肥料を利用しないことは、農協の意向に反する形となってしまう。農協や周囲の農家と衝突してまで、自然農法を実践することは困難である。それに比べるとインドでは、個々の農家が、どのような農法を採用するか、より自由に、主体的に選択しやすい形になっているように見受けられる。もっとも、インドの農業や農村のありようは地域によって大きく異なっているため、より詳しく丁寧に分析していく必要がある。

またインドでは、ラジーヴ・ガーンディー首相やナラシンハ・ラーオ首相など、トップレベルの政治家や官僚が、訪印した福岡に面会した。近年も、複数の州で、州首相が率先する形で「自然農法」推進が提唱されている。草の根の民間レベルでの動きだけでなく、行政の側が、少なくとも表向きは、自然農法に注目してきた点は、インドの大きな特徴であろう。

(3) ズレや相互促進作用—グローバル化プロセスのダイナミズム

『わら一本の革命』をはじめとする福岡の著作は、日本やインドの書店では、「環境」「農業」「思想・哲学」といった書棚に置かれていることが多い。しかしバンコクの書店では、『わら一本の革命』タイ語版が、マックス・ウェーバーやベネディクト・アンダーソンの本などと並んで「社会科学」の棚に置かれていた(2017年7月のバンコク訪問時に筆者が確認)。上海の書店では、『わら一本の革命』中国語版が、村上春樹の小説などと共に「日本文学」の棚に置かれていた(2017年9月の上海訪問時に筆者が確認)。このように、福岡正信や自然農法の受け止められ方は、各地で異なっている。

また、福岡正信が各国を訪問し講演する際、福岡自身がもっとも訴えたかったのは砂漠の緑化というテーマだったにも関わらず、聴衆はそこにはあまり関心を持たず、むしろ、自然農法の技術習得の具体的アドバイスを期待していた、といったズレが生じる場合があったという⁵⁾。発信者側と受け手側の間にズレが生じ、そのズレにも関わらず、あるいはズレたままの状態で、自然農法が伝わっていく、という複雑な作用を見過ごしてはならないであろう。

しかし、そもそも自然農法とは、完成された唯一の「本物」のあり方が確定してい

5) 筆者による矢島三枝子氏へのインタビュー(2018年2月12日、岐阜)。

るものではない。自然農法は、創始者の手元においてですら、すでに常に変化の中にあり、永遠に変化し続けていくものなのだと捉える見方をすることも可能である。一般的には、つい、発信者の側にまずオリジナルの「本物」が存在していて、それが世界各地に広がり土着化していくなかで、少しずつ「歪んで」いってしまうものだ、といった見方をしてしまいがちであろう。しかし、そうした捉え方を避けて、オリジナルの「本物」の存在を想定しないという地点から分析をしていく方法も、有効なのではないだろうか。

例えば、ラージャー・ターイタスらは、福岡に会い、直接助言を受けたことが、大きな励みとなった。しかし逆にそれは、福岡にとっても、同様だったのではないだろうか。福岡は、バスカル・サーヴェーの農園で「ここは本当のパラダイス」だと感激していた。発信者の側も、受信者側から逆に影響を受け、変容していくものだと考えることができる。つまり、発信者と受信者の関わりの中で、相互促進作用が生じるのである。

おわりに

本研究では、自然農法がインドに広がった過程を明らかにするため、まず、福岡のインド訪問の経緯と、インドにおける自然農法の実践の一端を明らかにした。そのうえで、自然農法の「発信者」側と「受信者」側、そして両者の相互作用という3つの局面に注目し、分析を行った。

本研究の後半部分で筆者は、自然農法のグローバル化を事例として、グローバル化プロセスを3つの方向から分析するという方法論を提示した。それは、「グローバル化」プロセスを、まず「発信」局面と「受信」局面に分けたうえで、①「発信」局面のプロモーションの力と、②「受信」局面の諸事情を分析し、さらに③グローバル化プロセスにおけるズレと相互促進作用のダイナミズムを分析する、というものである。

グローバル化をめぐる従来の研究では、グローバル化が常にローカル化（土着化）を伴うことを明らかにしてきた。それに対し、本研究では、グローバル化の「発信」局面への注目や、発信者側と受信者側の関わりのみならず相互促進作用が生じることの重要性を強調した。

謝辞

本研究は、愛媛大学リサーチユニット「グローバル地域研究（GLOCAS）」、愛媛大学法文学部人文社会学科、JSPS 科研費15H03142、16H05659、16K16664、19K21723の助成を受けた。故・福岡正信氏、福岡雅人氏、福岡大樹氏、矢鳥三枝子氏、故 Raju Titus 氏、Vijay Jardhari 氏、Abhijay Save 氏をはじめ、多くの方々にお世話になった。研究会・学会発表や、資料集（石坂2018, 2020）編纂に際しても、多くの方々から貴重な助言をいただいた。心から御礼申し上げます。

参考文献

- 石坂晋哉（2007a）「スンドラール・バフグナーと福岡正信の対話—ガンディー主義者訪日記録（一）」『サルボダヤ』第47巻8・9号（通巻552号）、10-18頁
- 石坂晋哉（2007b）「スンドラール・バフグナーと福岡正信の対話—ガンディー主義者訪日記録（二）」『サルボダヤ』第47巻10号（通巻553号）、11-16頁
- 石坂晋哉（2011）『現代インドの環境思想と環境運動—ガンディー主義と〈つながりの政治〉』昭和堂
- 石坂晋哉（編）（2018）『Natural Farming Today 1（GLOCAS series 2）』愛媛大学リサーチユニット「グローバル地域研究」
- 石坂晋哉（編）（2020）『Natural Farming Today 2（GLOCAS series 5）』愛媛大学リサーチユニット「グローバル地域研究」
- 福岡正信（2004a）『自然に還る』新版、春秋社
- 福岡正信（2004b）『無Ⅲ 自然農法』新版、春秋社
- 牧野財士（2011）『福岡正信先生とインド—インドの緑化につながった“無”の哲学』地湧社
- Jardhari, Vijay, (2015), *Barahnaja: Traditional biodiverse crop system in Uttarakhand*, (translated by Biju Negi.)
Swanand Niwas, Maharashtra: SOBTI